

気象庁から桜の開花予想が発表されたが、それによると静岡は3月28日だそうだ。春近しかと思ったら夕雨がいつしか雪に変じ、今朝は一面雪の原であった。この気候の変動の激しさは確実に春が近づいていることの証左であろう。

先日富士学校音楽隊の定期演奏会が御殿場市市民会館で行われたが、日中2回の公演に延べ1600人の聴衆を迎え盛会であった。昼頃、一時みぞれに見舞われ、それが話題になったとき、鳴沢村の村長から「山中 照る照る、御殿場 曇る 須走 霧さぶろう」と昔から云われていると、須走の天気複雑性を表す言葉を教えて頂いた。御殿場や須走地区は、地形の特異性により、複雑な天気現象を呈することで夙に有名であり、土地の古老は、天気現象についての長い経験や観測等から、色々な天気判断をしてきた。古くから言い伝えられてきた天気俚諺も少なくなく、それらの中には、科学的根拠のない迷信に近いものもあるが、気象学上ははっきりと理論づけられているものも少なくない。

富士駐屯地修親会が発行している「富士」記事の昭和52年10月号に須走・御殿場地区の天気俚諺や富士山の雲による天気判断等が掲載されている。それを紹介させて頂く。

I 富士山の雲による天気

① 富士山が”お笠”をかぶるのは雨の兆し

お笠というのは笠雲のことで、富士山に吹き付けた気流が山体に沿って上昇するが、この時気流の中に沢山の水分を含んでいると、気流の上昇部に雲を生ずる。この雲が山頂部を円く覆ったのが、所謂「笠雲」である。笠雲の出現は、富士山頂付近に接近した気流が湿っていることを示し、天候悪化の前兆とも考えられるわけである。

笠雲の種類にもよるが、笠雲が生じてから、やがて山頂も下界も雨（または風）になる確率は75%程度と言われている。

② 富士山に”吊雲”が現れると強風となる。

”吊雲”というのは、富士山頂からやや離れたところに笠雲に似たレンズ型の雲が生ずることがあり、これが吊雲である。これは強風のため山頂付近の気流が一旦吹き下ろされ、再び上昇したとき、その上昇部に生じた雲のことである。

吊雲の出現は、富士山頂付近に強風が吹いていることを示し、これが現れるとやがて下界にも強風が出てくる。吊雲が出現し、下界も強風になる確率は75%程度と言われている。

③ ”帯雲”が富士山の中腹以上にかかる、その日のうちに雨になる。

”帯雲”は、文字通り富士山にかかる帯状の雲である。好天の午前中、帯状の雲が山

裾に発生し、次第に厚くなり層状を示しながら広がっていくことがあるが、これが帯雲であり、天候が徐々に悪化していく前兆である。この帯雲が富士山の中腹以上に懸かると雨となる公算が大きく、その確率は90%程度とされている。

④ ”犬くぐり”が出ていれば、雨にならない。(御殿場地区)

”犬くぐり”とは、愛鷹山や富士山が雨雲に覆われていても、十里木付近の緩傾斜地が僅かでも雲と離れているとき、即ち犬がくぐれる位晴れていることを言っている。これは天候が西の方から回復していることを示している。

⑤ 双子山の方の空が明るくなると雨が上がる。(又は雨が降らない)(須走地区)

双子山の方が明るく見えるのは「犬くぐり」と同じように、天候が西の方から回復していることを示している。

⑥ 小富士の上に笠雲がかかると、その日のうちに雨になる。(須走地区)

小富士の上に笠雲が現れるのは、富士山頂に笠雲が生じるような天気現象が、もつと下の須走地区に出現したことを意味するもので、その日のうちに雨になること間違いなしとされている。

II 天気現象による天気判断

① 箱根の方の山(箱根外輪山)がはっきり近く見えるのは雨の兆し。

② 夜霧の深い時は、明日は天気がよい。

③ 朝靄のかかるときは、その日天気がよい。

④ 金時山に雨雲が隠れるとまもなく雨が降る(須走地区)

⑤ 沢の流れの音が聞こえるようになると雨が近い。(御殿場地区)

⑥ 北風が吹き始めると、天気は回復する。(須走地区)

⑦ 虹が富士山を跨ぐは、大雨の兆し。(須走地区)

⑧ 夕方富士山側に鯛雲が出ると雨が近い。

⑨ 北西から南東方向に長く伸びた雲が出ると晴れ。

⑩ 春は、愛鷹山に雲が現れると雨が近い。(須走地区)

⑪ 秋は、太刀山(立山)の方向に雲が現れると雨が近い。(須走地区)